



かかる事の諾へうべなはれながら何故尚残る疑團のあるのか？

松陰は三十才にして獄に投ぜられたが、それまでにすべての事をなしとげたと信じてみたのか。獄中の安心は何処より来たか。尚生きてなすべき事の多きに焦燥の感をたかぶらせなかつたか？ 「何々の為に死す」となれば、目的は近いが不徹底な残滓がある。

かかる一方の目的に対する死ではなく、宗教の悟りの如き生死を超越する道は如何。平常心に於て既に生死を脱し、如何なる面に於ても無碍に活動し得る如き心境は？

○新女苑十八年六月号 読書について

亀井勝一郎  
河上徹太郎

世の中が理窟つぽくなつた 懐しさがなければいけない 意味の説明はあるがなつかしさが無い 議論が多い――理窟・形式 信仰 神仏の説明をする奴は多い。然し祈りの心が根本だ。祈りの心は言ふ事が出来ぬへどこまで引用で、どれが感想か不明

○法金剛院 かかる日もなほ閉ぢられて古寺の障子に秋の陽は照りをらむ（九、二八）

○熱発患者 掌をやればもろくも落つる頭へかみへの毛を敷布の上に置いて見つむる（九、二九）

○憶母 且つはほめ且つはすかしつ秋の宵へよを子に肩揉まし母はあまさむ（一〇・一）

○懐父 たしなまむ酒を乏しみ寒々とわがちちきみは宵寝しまさむ（一〇・三）

○秋の我が家 檐下へのきしたへに垂れし仕事着陽に照りて白く乾ける畑田へはたけだへの泥（一〇・四）

日暮れていまだかへらぬ人待つと檐下深くこもるぬくとさ（一〇・六）

檐下に閉へたゝてし雨戸に秋の陽のほのほの照りて小さきくもへ蜘蛛ゝ這ふ（一〇・六）

○故里 今頃は鎮守の森に椎の実を落すと子等が石投げ居らむ（一〇・七）

○懐父 せがまれてオハナン始む父親の酔ひて今宵の機嫌よろしき（一〇・八）

○病院恤兵文庫 殆んどが首尾を欠きたる本なるに借ると患者ら群がり競ふ（一〇・一二）

○故郷の山峡の池や田や山を想ひ一首をと苦しむ程に遂に次の如きものとはなりぬ。勿論即景にはあらず。

映空のせばみの果ての杉木立ここより奥は竜神が岳（一〇・一四）

○偶感 へ日付の順が狂っているが、前の歌に続けて記している。ゝ

炎熱の地に行き悩みて汝が喝へ※渴ゝ望したるは一首の青き梅の実にあらずや。身熱昂へたかゝまりて食進まざるとき、汝が希求せしは梅干の酸味ならずや。

而も平時汝は青梅を欲し梅干を求めたるや

また静寂清澄の気みなぎり、秋陽さんさんと照り映ゆる故郷の野面へのづらゝを想ひ見よ。そこには群がりなれへ成ゝる柿の実の光るあり、稲の穂のきらめき、芋の葉の照り、囁目へしよくもくゝのすべてが心にふれ胸をおへをゝどらすすがにあらざや。

而も汝嘗て故郷にありてかくもその景に心動きたるや

ここに思ふ。美へうるわゝしの玉は遠きにあらず 求むるものの側にあり

照顯脚下 されば幸福を追ひ求むるものよ

汝追ひて得ん幸福はあらざるべし。退きて己が心を本然のかなしきへ※金十質へのせよ。然らば汝自へおのずかへら幸福ならん。 求道者よ

汝如何なる神を求めてあくせくするや。神に形容ありとするや。否と知りてなほ汝の目の外を模索するや。廓然へかくぜんとして心を天空の曠へひろきに晒せ。然らば汝そこに神を仰がむ。

かくて真も善も美も聖も、ただ汝の心その中にこそ求めうべし。実に求めうべきのみにして必ずしも求め得るにはあらざるなり。

可能をしてよく必然ならしむるは すべて汝の力にかかれり(力一聞へもん・思へし・修へしゆう)

汝よく力へつとめよ 後日整理すべし 19・9・29 へ後日訂正したものである。ペン書きの横に鉛筆がきしている。いまそれによる。

○婦人公論(十九年二月号) 超空 十五年春 へ記入月日不明

- ・ 日ねもすに青山霞む大倭ここに肇国へハツクニ治へシラしたまへり
- ・ 天雲のそこひにこもる雷へカミが音四方に響へトヨみて国はおこりぬ
- ・ しづかなる白禱へカシの尾上へヲノへに向ひ居て心は哭へナけりあまりたらへば
- ・ 松風や遠世の如し畝傍山山の磐根へいわねに額へぬかふして聴く
- ・ 草莽へクサカゲの身をはかなめり檀原の遠すめるぎの宮に参来へマキキて
- ・ 畝傍山白禱の尾上に鳴く鳥の声澄む聞けば遠世へとほよなるらし

「遠世の音」と題した小文の中に発表してある右六首の歌を一瞥し、たちまちに胸のビーンと張るのを覚えた。雑誌類で屢々諸氏の作品に目の触れる機会があつたが、何時も見たいといふだけで何の残る感懐もなかつた。然しさすが凡愚の自分へに、この強力な調べへに対しては無感動に過ぎ去ることはへできなかつた。

○芭蕉　へ月日不明ながら右に続く

“それ天地は風雅なり。万象もまた風雅なり。此風雅は仏祖の肝胆なり。造化に随て四時を友とす。見る所花にあらざと言ふことなく、おもふ所月にあらざといふ事なし。心月にあらざれば禽獸に等しく、かたち花にあらざれば夷狄に類す。夷狄を出、禽獸をはなれて造化に帰れよ。古池や蛙飛び込む水の音”

今にしてはじめてこの句の内容が判る様だ。今まで続けてみた読書・歌作等すべての努力が「外容に止るな」と自らに言ひきかしながらも、ついそれに停つてみた様だ。句の表現すべき（1作者が表現しようとし）内容。それは正に「神秘」である。巧な言葉で表はしたからといつて必ずしも他人に通ずるものではない。それは又「鬼」でもある。或は「実相」である。「詩」の精神がこれであり、その属性を幽玄なり枯淡なりの言葉によつて説明が試みられてゐる。然し幽玄枯淡もその由つて来る本性の詩精神に触れ得ずして味到し得るものではない。

秋陽に照り映ゆる柿の実の美しさに感動共鳴し、それを詩に歌に俳句に絵画に表現しようとして苦しんだ人も多かつたらう。そして実に表現し得、且つその表現された内容を感じ得た人も多かつたであらう。だが、柿を見て食ふ事を思ふ自然人と、一応美しさを口にする概念的詩人—ディレッタントと、柿を表現した作品に対して目を働かしながら心には通じないボクネンジン（2具眼者の看取しうる）は更に数多かつた事であらう。

而してこの柿の美しさこそは宇宙万象に通ずる詩の内容であり、神秘であり、神ともいはれ、仏ともいひ得よう。これを芭蕉は「風雅」なる語を以て呼んだのである。

○幽遠なる幻想　しづもりや太古のごとし山深くたたふる水のをへ※黒十幼く疑へこりたる(二〇・一七)

○十月二十一日遼陽陸軍病院ニテ俸給受領

九、十両月分金二十七円九十銭(一ヶ月十三円九十銭)

へ右の記事をはさんで、いろいろ、羊羹、蒸かすてら、でつち羊羹、大豆(宮崎県の大豆粉の練物)、大豆味噌(一宮の乾味噌)の製法を記す。今略す。

○10・22へ十月二十二日

診療軍紀がどうの、病(院)内の規定、上司の命令等々を云々しながら、その実は衛生兵の個人的感情によつて暗くされてゐた奉天病院での生活が十数日も続いた果へはて、とうとう我々に転送の達しがあつたときには全く開放された気がした。へ七年次・八年次とかいう上等兵の制裁はすどかつた)

南京から共に来た連中の半分以上が内(地)還へ送となり、残りの一部が奉天の別病棟へ移り、他の一部即ち我々が遼陽へ送られることになつた。これが二十六日である。

遼陽駅から病院自動車で市内をつききり、田舎とも市内とも見えぬ地帯―工場か兵舎の様な平屋の大きい建物が散在してゐる―を経て第一陸軍病院の門前に着いた時へ感じは、へ平凡で、近所の建物と何の変りもない貧相な平屋で、植込とてなく、昨年今年に植ゑられた植木がぼつぼつと散つてゐるにすぎない。ところが一歩足を内

へ入れたとき、ピンと感覚にふれて来たものは清らかな空気であつた。次には整へられた感じ。即ち清潔整頓が行き届き、設備の整つた病院。―ここでは長期療養もテンホーへけっこうだぞといった気持ちに充たされた。

その後今日まで約一ヶ月。人員過多のため娯楽室に一時しのぎの生活を続け、病室内の様子は判らないが、これといった仕事もなく、退屈に眞味見えて案外退屈もせず過して来た。ゼイへ贅へ沢を言へばきりが無いが、甘いものがなかなか上らず、一週二度ごく僅かな酒保品しかないのと、禁煙なのとがもの足りない。食事は余りうまなく、量も多くはない。然し諸方の病院を回つて来た今となつては、さうあれこれと要求しないだけの、落ちつきといふかあきらめといふか、さういふ納得のゆく様を考へ方をしては、自分にいひなだめるだけの暮し方が出来る様になつてゐる。又事実何処へ行つても良いことばかりではない。どんなに悪い様に見えても何処かに良い点がかくれてゐる。南京ほどの給養のいいところでも、南京虫に悩まれて二日も眠れなかつたし、あれ程苦しかつた奉天の生活も、読書の設備の優れてゐた点は嬉しく、その堅苦しい諸規則―例へば禁煙―も、かへつて遼陽での諸制約を苦に思はさないだけの順応性を与へてくれたと思へば有難い。ここでは読書の設備も悪く、端書が出せたり、軍医殿の診断へ察へが確実に行はれたりする以外には、特によい点が見当たらないが、この平凡な病院もさて他日顧みる時期が来れば、幾多のなつかしさ、よさを以て想出すことであらう。ただここばかりではなからうが、気温の寒さが気になり出した。ここで冬を越せるだらうかとの心細さが、夜冷えきつた足のあたたまるのを待つてゐる間によく迫ってくる。一時は心弱くも内還の事などを想つて愚な夢を追つてもゐたが、今では出来るだけ早く本隊を追求したい念願に充ちてゐる。その気持の一隅にはとてもこの様な寒い土地は自分の暮

せる所ではないといふ一見ばかげた気持も存在してゐるのである。兎に角昔から、一事にあきつばい性格を有つてゐるためもあつてか、何時までもこの病院でのんのんと日を送ることは出来ない。かやうにして過される日日は、貴重な自分の生涯の残りを、ただむだに殺してしまつてゐるものとしか思へない。

夜 来 庵 か ぜ だ よ り 一 若 い 日 の 森 田 曠 平 一 (四)

原 田 憲 雄 編

へ一九三六(昭和十一)年三月十二日付、午後消印、手紙。水干町。

い、本を随分みつけてあるね。ことに明暗はい、だらう。恋慕流しは此の間あの本屋へ行つたのだが、あまりい、本ではなかつたので(それに価が八十銭)買はなかつた。てにをはの欠点、浅学を暴露して愧しい。自分でも気になつてゐたのだがとにかく変なものになつてしまつた。あのさにづらふは恥かしさのため顔をあかめてゐるといふ様を気持ちでつけたのだ。自分かつてにつけたのだからゴリオシだ。それから前の「夜をこめて雪の降り降る」の夜をこめては一晩中といふ意味で使つたのだがいけないから。この歌はあまりい、のでないからどうでもい、のだが。

今度の君の諸作中一番印象に深かつたのが「春ちうに街はみぞれの：：」だつた。実感がひしひし胸に迫る。佳作だよ。ことに春ちうにとちよつとおどけた(?)所がいやみがなく適切ですきだ。「陽の光緑にもえて」もい、と思つた。「夜の更けを君と二人：：」は中々すみへ置けぬ歌ひぶりだ。相聞のうちで一番優れてゐると思



つた。「春の夜は」連作はすらりすらりと歌つてあるのがすきだ。相当ローマン的なものが多いが。

何時ものことながら、君の精力にはほとほと驚くよ。試験前だから相当勉強もしてゐることだらうに、これ程の作品が出来るのはものすごい。

前に僕は白秋があまり好きぢやなかつたが、雲母集や多摩へ多磨：昭和十年白秋創刊の短歌雑誌（本屋の店頭で読んだ）をみて随分好きになつてしまつた。やはり童謡や民謡なんかから来てゐる所が多いがよくこなされて、素晴らしいと思つた。

最近買つた本では茂吉「あらたま」（再版）（一円五〇銭）これは三版で昨年東京で二円五〇銭で売られてゐる。但し函付だが、牧水「くろ土」（初版）（一円五〇銭）「静かなる旅を行きつ、」（初版）（三〇銭）等だ。外に吉井勇のものを買つたがい、本ではない。

あつきあつき八つ手のはつば夕闇にしづるるたびにうごきけるかも。

まなかひの山はしみらに雪降りてしんに淋しくなりにけるかな。

さざんかの葉なめて通る初春の光はしげくかけろひにけり。

お月と狐とまつしろ小石。

月かけはさやかなるかも川の瀬のまつしろ小石の上通る水

まつしろな小石の上を川水はしんに光りて音たてにけり。

友禅のたもとの長きゆうれいがまつしろ小石をふみにけるかも。

正にほむまきしる 狐 けしんが着る月二夜に いて来るかも。

小石のや上りのりほるしるかつね 今宵もせこを赤ひき泣いてみる。

小石のや上りのりほるしるかつね 今宵もせこを赤ひき泣いてみる。

こんな夜は人間さへも時々になつかなお月を泣いてみるとさ。(以上)

雲間より出づる月光すさまじく鉄路は白く光りけるかも。

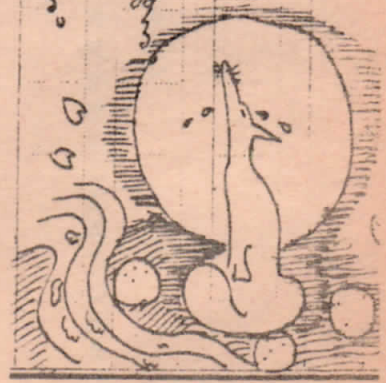
がうと鳴る鉄路の上の終電車一直線にとほりすぎけり。

落ちなづむ月の光はかうかうと鉄路にてりて夜ふけにけり。

せめて週に一度は顔を見せてよとかごとをのらす手紙いとしも。

三月十八日 午後消印。はがき。水干町。

へ三高入学へ試験がいよいよはじまつたさうだね。しつかりやつてくれ給へ。何日から始まるか小生少しも知らず失礼した。白聖会の招待状送つた。二十三日に来てくれるかも知れないとの事だがその頃はつと会場にある都合なのだ。だからその日会場で合はないか。それから後一緒に家へ帰つてもよい。都合悪しければハガキ一本頂戴。前田夕暮「深林」(五年初版)買つた。価二円。



三月二十三日 午前消印。はがき。住所記入なし。

昨日は愉快だった。僕はあの晩からたうたう本格的な感冒でねこんでしまった。あの部屋で。今日はお祭り（西村家は天理教だ）にもやつと出た。今はつかれてゐる。今晚もわぎもが来て呉れるさうだが、こんなところで一人ねてゐるのは少し心細い。しかし二日はかりねたら恢復するだらう。

昨日は君が帰つてから挽歌を考へてゐたが終に一首も出来ず、今日はたまで作る気がしない。きよろろ鶯はしらべてみたまへ。もし限定版ならもうけものだ。君が買はぬなら僕に譲つて呉れ給へ。多分君が買ふだらうとは思ふが。又ひまな時来てくれ玉へ。昨日の辻君今日は来ない。

三月二十七日 午後一時付、午後消印。てがみ。水干町。

お手紙拝見。ほととの歌みせよとのことほとほと困却仕候。けれどその中のそれほどでもないのを少しみせませう。

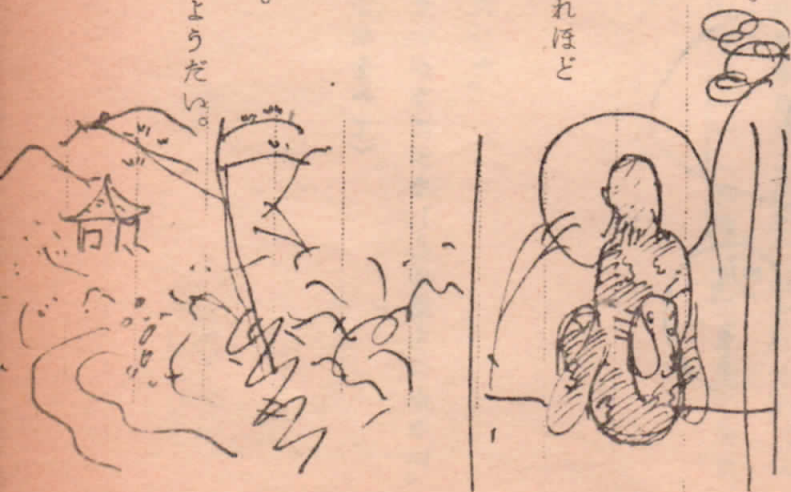
こ、ろづまいだきてさぬるひとのこのわがみのいのちいまたゆらしも。

こ、ろづまくちびるぬれてあがいだくかひなのおくにえみにけるかも。

そののちのなみだにぬれしわぎもこのほ、のうぶげのいとほしさかも。

さにづらふわぎものちぶさやはらかくてくちづけしつ、なみだながれぬ。

まあこんなものだ。もつといやみたつぶりのがあるがこれはカンペンしてちようだい。



春あさみをささのうら葉かへしふく風さへさむき墓に來りぬ。

くわんぼくのこぬれの奥の渋谷みちかすかにつづく奥津城どころ。

そのむかし位牌をいだし渋谷みちなみだぬぐひて行きしおもほゆ。

らんまんと金の襖にさきほこるさくらこ、だくみだれたるかも。(山樂の絵をみて)

もつとかきたいのだが作品がない。この頃は不勉強でいけない。もつと作りたいがなにがなし心が落ちつかない。

まかふしぎあらまかふしぎまかふしぎリンデンバウムの緑蔭に子どもがたつた。

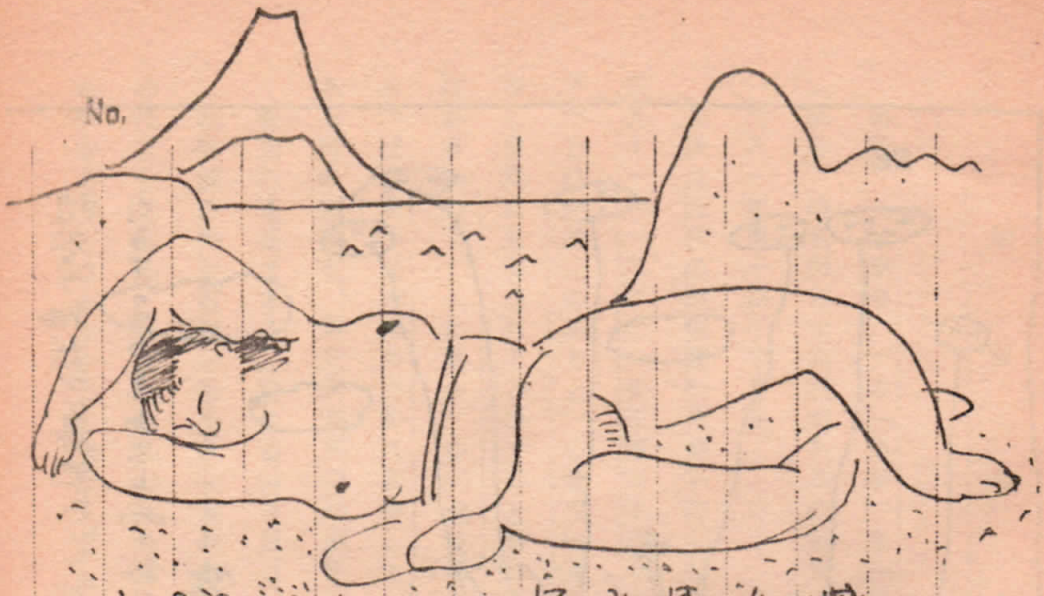
まかふしぎ天と地面をゆびさしてとびだしたるはしやかむにほさつ。

まかふしぎしやかむにぶつは母君のほとよりいでず腹けやぶりぬ。

まかふしぎほとより出ざるあかん坊はよにもとほときしやかむにほさつ。



No.



城の山

女うらと

ほむかえぶり

みれば

ほとと

まし

こねたるま。

夕秋

自然は女のほとを

ほつせんし

まぶかえりして

みておたるま。

前頁の絵とこの絵はどうだね。

上の絵は少々ワイセツだね。ほとはこれと

描くねはぶらぬか沙汰の君がまた奮てる

といふんがこれをやめて。

次の頁に北何えのくまの。この二枚の

絵も相書さへしてのいさうだよ。

釋迦の絵は歌と三合とあはさうと

思つんのねがや何?

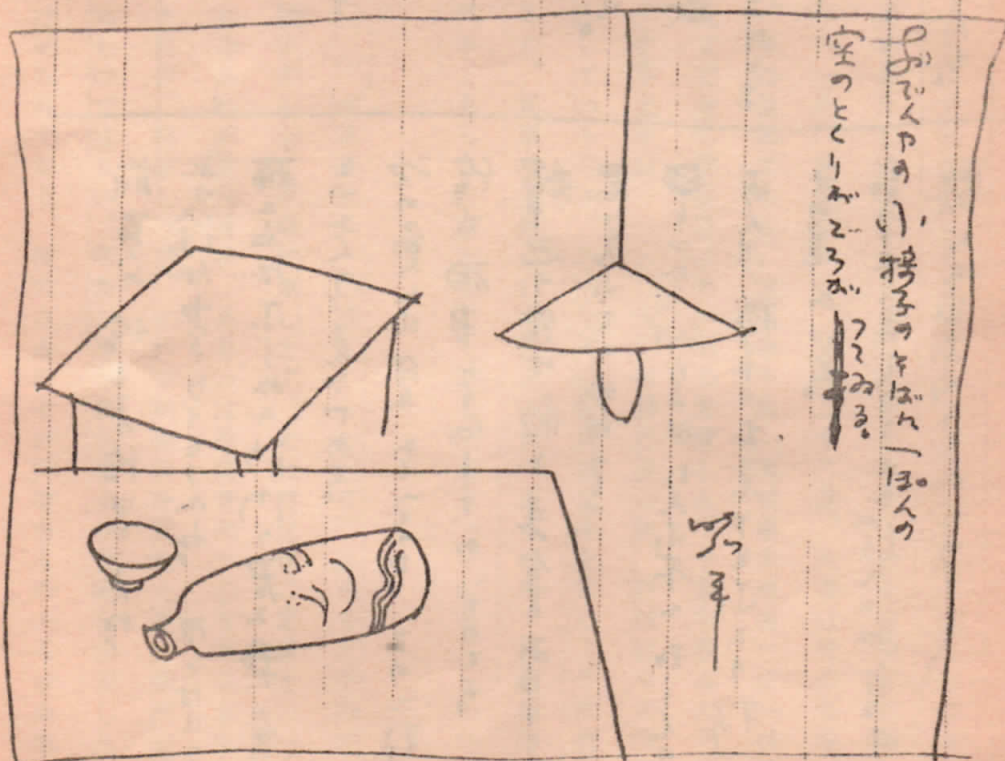
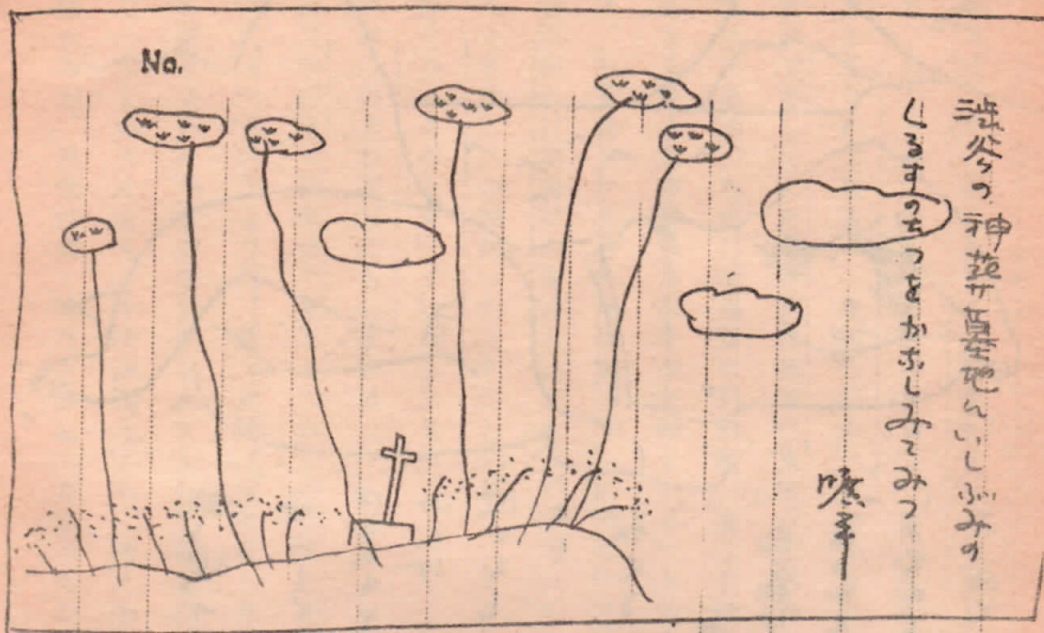
① リンデンバラムはじんふ木かねらん?

あんぶ 柳子のままそふ、なり 不

ものをいいた。

わつこらあしてこれ絵へ。三合の試

験んはあふ、あつてあいの



前回、「如夢令」の「溪亭」を「谷のバンガロー」と訳し「溪谷の小亭」と説明した。のち、「溪亭」は泉（溪谷）の名だとする説があるのを知った。岳園鈞「玉中之暇一談」談「李清照集校注」的注釈（『文学遺産』一九八一年第一期）である。

岳氏は元代の地理書『齊乘』に「歴下の名泉」七十二を挙げ中に「溪亭」の見えることに注目し、蘇轍（一〇三九—一一二二）の「徐正権秀才の城西の溪亭に題す」る詩を傍証とし、李清照の「溪亭」はこれだとする。「歴下」とは「歴山のふもと」の意で山東済南の歴城をさす。すなわち清照の出身地である。歴山は古代の帝舜が耕作し帝堯に見出されそのむすめと結婚する伝説の地。氏はまた、歴城西北の大明湖の西端を「西湖」といい蓮の花が多いので、「如夢令」の「藕花深處」は西湖をさすという。この二事を基礎として、氏は論を進め、「如夢令」は清照の父李格非が都に勤務した一〇八九年の後、清照結婚の一〇〇一年、すなわち六歳から十八歳までのある時の体験を、都を去り夫の郷里青州に住む一一〇七年二十四歳までに追憶して作った、と推測する。

魅力的な説である。校証めいた話、はわずらわしいかもしれぬが、私見を加えておく。

趙明誠の『金石録』巻十八「漢趙相劉衡碑」の末に「劉衡の墓と碑はいま齊州歴城県界中のいにしえの平陵城のほとりにある。わたしはかつてみずから墓下にゆきこの碑を見た。で、拓本をとることができた。墓の前には石獸があり、なかなかの出来ばえだった」と記す。『金石録』は全般にソックないほど簡潔な書き方がしてある。

明誠は、ずいぶんあちこち拓本をとって歩きまわったはずだが「みずからゆき」と書くのは、わたしの気づく限り、ことと巻二十四「唐登封紀号文」に「政和の初めわたしはみずから泰山にゆきこの二碑を見得て記録した」とあるぐらいである。「政和の初め」が元年なら一一一年、明誠三十一、清照二十八歳、夫妻は夫の郷里、山東青州で暮っていた。青州は歴城の東約一二〇キロ、今の益都である。また巻十四「漢從事武梁碑」に「碑は済の任城にある。わたしは崇寧の初めに一度この碑を見て完全に保存されているのを愛した。十数年後ふたたびこの拓本を見えたが最後の四字が欠けている」という。崇寧元年は一一〇二年、結婚の次の年、任城は今の済寧である。「劉衡碑」をみた年は記さず「かつて」とほかしているのが、わたしには深長な意味を含むように読める。「金石録」は趙明誠の著述ということにはなっているが、実質は清照との共著というべきものだ。「劉衡碑」を見たときが二人の相知ったときだとすれば、それを何年とあらわに言わずとも「あのととき」でいい。「かつて」とはその「あのととき」ではなからうか。

明誠の母方の叔父に当る陳師道（一〇五三—一一〇一）が黄庭堅（一一〇四—一一一五）にあてた手紙に「明誠は文学好きで蘇東坡やあなたの詩文を見ると半枚数字すら必ず筆録秘蔵します。それで父親の愛情を失ったくらいです」というように、蘇・黄両氏を尊敬した。そのかれが資料集収、あるいは故郷青州への往來の途中、東坡に囁目された李格非を訪問したことは、断定はできぬが、推察しうる。かれが劉衡碑を見たとき、清照が案内に立ったということも、やや突飛ながら、考えられぬわけではない。儒教の道德観が男女の交際を拘束したことは確かだが、宋代は明・清ほど厳しくなかったことは知られており、清照自身にその拘束をもともせぬ意気が



ある。

ともかく岳氏の説は、「如夢令」を結婚前後の作と見るわたしの考えを裏付けて力がある。だが氏の説の通りとすると「溪亭」の私訳は改めねばならぬ。ただ、氏の挙げた傍証の「溪亭」は、溪の名とするより亭の名とすべきようにわたしには読める。徐正権の「溪亭」と名づけるバルコニーが蘇轍にうたわれ名高くなり、所在の溪谷がその名にちなんで「溪亭」とよばれ、元代には既に「名泉」の一つとなっていて「齊乘」に著録されたのではないか。蘇氏の詩は歴城から遊覧の舟が往来することをうたう。この溪谷には徐氏のものだけではなく、遊客の需めに応ずるバルコニーの幾つかが点在したとする方が自然であろう。「如夢令」詞中の男女のランデヴーの場所をそのいずれかに限定する要はない。私訳・拙解は改めなくてもいいだろう。

明誠の父が出たしおに、その家について述べておこう。

趙挺之（一〇三〇—一〇七）、字は正夫、密州諸城を原籍とする。進士として官界に入り、一〇八六年、秘閣校理、その翌年と翌々年に蘇軾を弾劾した。この蘇氏が東坡である。当時の政界は新法・旧法の二党に分れ、天子や皇族までまきこんでしのぎをけずっていた。新法党は王安石の革新的なしかし実状には合わない政策を急速に実行しようとし、旧法党は司馬光や蘇軾を中心としてむしろ旧法の方が人民のためだと反対した。初めは思想対立の意義もあったろうが、一方が政権をにぎれば他の有力者を苛酷に罰し、泥仕合の様相を呈していた。挺之は、はじめからの新法党でもなかったらしいが、進級に関する審議で蘇軾にけなされたことから、はっきり新法党の人となり蘇氏を目のかたきとするようになった。一〇八九年、地方官として転出するが、一〇九一年、国

子司業として中央にかえり、以後、吏部侍郎・尚書右丞・尚書左丞・中書侍郎・門下侍郎・尚書右僕射・觀文殿大學士・佑神觀使と順調に上り一一〇七年六十八歳で死ぬと司徒を贈られ「清憲」とおくり名された。官僚としては最高位を極めたことになろう。これが明誠の父である。母は郭氏。長兄の趙存誠はやはり早く官界に入り一一三二年、広東安撫使の職で死ぬ。次兄趙思誠、字は道夫、これもまた順調に進み一一四七年、宝文閣待制提挙江州太平觀の職で死ぬ。また兵部侍郎の某氏にとついで妹があつた。

さて、明誠が幼いころ昼寝をしていて本を読む夢を見た。目がさめたとき、その中の三句だけ覚えていた。それは「言と司とが合う。安の上はなくなつた。芝芙の草が抜けた」である。何のことか分らないので父に問うと父はいつた「言と司を合わせれば詞の字。安の字の上のウ冠がなくなれば女。芝芙から草冠が抜けたら之夫。つまり「詞女之夫」さ。お前が大きくなつたら女詞人の亭主にでもなるってことかな」

王氏の『校註』付録に引く『崇禎歴城果志』に見える説話。後人の作り話としか思えないが、もしそんな話が趙明誠の周辺で語られていたとすれば、明誠と清照の結婚がどれほど父親にとつてのみこみ難いものであり、父をとりまく新法党の人達にとつて奇異に感ぜられたかを反証する逸話のような気がする。ロメオとジュリエットが死によつて解決したことを、趙家ではこんな話を作り二人の結婚は前世からの因縁と父があきらめ、世間への言訳とした。まずはそんなところではなからうか。美談と受けとる向きもあるようだが、おかしすぎる。

清照にもう一つの「如夢令」があるといつた。それをとりあげよう。

きその夜 雨そほる風はやりき／うまいしぬ 残んの酒もほさぬまに／簾（みす）まく人にたづぬるに／  
言ひすてぬ 海棠はもとのごとしと／知るや否／知るや否／緑肥え 紅（くれなゐ）の瘦すらむものを

昨夜雨疎風驟。

昨夜、風はそほるにふり、風がはげしかった。この初句、すでに人のいうように唐の詩人孟浩然の「春暁」を本歌としてうたい出した。孟氏の作につきわたしはかつて「春暁」と題する小文を書いた（『あすあすあす』一九七七年四月号）。そのうち、ここに關わる三、四句についての解を引いておこう。

「夜來風雨声」 昨夜からの風雨の声。荒れすさぶ響きの中を、びっしよりになつて、なおさかのほり、眠りの向こうの「夜」にまで抜け出ると、そこには、「花落」真紅な花が、踏みしだかれたように、落ちていた。瞬間、意識は現在に突きもどされる。「知多少」 突きもどされたところは、明るくかがやかしい暁の、拭ったようにさわやかな青天の下である。だが、眠りの向こうに忘却していた落花を知ってしまうと、かがやかしさも、さわやかさも褪めてしまう。その花の落ちたことが、自分の眠り以前の行為とかかわりがあるのか。それはわからぬ。が、わからぬというのは、知りたくないからそう思っているのであることも、どこかで知っている。花の落ちたのが多かったのか少なかったのか、花のうけた傷がどれほど深かったのか深くなかったのか、それもわからぬ。が、わからぬというのは、知りたくないからそう思っているのであることも、どこかで知っている……。 「如夢令」にかえる。「雨疎風驟」は自然のすがたにないあわせ男女の愛のすがたを描く。雨は女、風は男で

あろう。女の愛はさほど深くはなく、男の愛は暴風のようにであった。女はどこか醒めている。だが男のはげしさにいつのまにかまきこまれてしまふ。

濃睡不消残酒。

まきこまれてわれにもあらず高まる愛に、われから男に求めていったとき、男はすでに絶頂を越え、来たときのはげしさとうらはらに嵐はおとろえ、ぐっすり眠りこむ。女の愛は、ひっそりと来て、男に手をとられ、やさしくさまよい、川辺をゆき丘にのぼり、草むらをわけ木むらに迷い、ふと山の頂きに立ち歓喜の声を放つても、またゆるゆると下りるかと思えば山のこぶにかくれ、山のくぼみにしゃがみこみ、走るかと思えば歩き、いくつかの岡をこえて麓についても、まだ湖のほとりで足をぬらしたり、溪にそつての散歩を楽しむものだ。

せっかくの美酒、ながい時間をかけてふたりでたのしめばよいものを、喝えたようにがぶのみして、深く味わいもせぬうちに酔っぱらい、ぐうぐう寝こんでしまった。あなたの望む通りであることがわたしの願ひ、などと口先ばかりはいって行くせに、何が望む通りであるものか：。うらめしくかこつているうち、それでも驟風にままれた疲れが出てきたのか、いつのまにか女も眠りこんでいた。さかづきに残った酒もほさぬまま。

「不消」を旧解の多くは「消えず」「消さず」と読むけれども、「もちぬす」と訓すべきこと、波多野太郎氏の『宋詞評釈』（昭和四十六年初版）にいう通りである。

試問捲簾人、却道海棠依旧。

夜が明ける。夢ともうつつともつかぬまどろみの中で、女はうとうとと昨夜の嵐のことを思っている。男はと

つくに起きて、太学だか何処へだか出かけてしまったらしい。

侍女が部屋にはいつて来て簾をまきあげる。外光がさつとさしこむ。明るく輝かしい朝らしい。ものためく起きなづみながら、ベッドからは見えぬ庭のかいどうの花、昨夜の雨でどんなにいためつけられたことだろうと簾をまく女にたずねてみた。女はろくすっぽその花の方を見やりもせずという「前とちつとも変りませんよ」

かいどうはバラ科の落葉低木で中国が原産、ミカイドウ、ノカイドウ、ハナカイドウなどがあるが、ここのはハナカイドウであろう。灰色の幹で小枝にトゲがあり葉は長楕円形、花は陽曆四月ごろリンゴの花に似た淡紅色の五弁花を開く。『群芳花譜』に「衆芳ヲ俯視シ、超群絶類ノ勢アリ。シカモ其ノ花ハ甚ダ豊カニ、其ノ葉ハ甚ダ茂ク、其ノ枝ハ甚ダ柔カニ、之ヲ望メバ綽約トシテ処女ノ如ク、他ノ花ノ冶容ナレドモ正シカラザルガゴトキタグヒニアラズ」といい、唐代の「花譜」に「花中ノ神仙」とたたえたことを伝える。蘇東坡が黃州に流されたとき飯住まいのまわり一面の雑花の中に一株のかいどうを見つけ、土地の人がその貴ぶべきことを知らぬのを長い詩に作ったことでも有名だ。

知否。知否。

わかっているのか、いないのか。わかっているのかいないのか。

簾をまくのは、おなじ女であつても定められた仕事をすませることしか心になく、問うひとの纏綿妻媿の感傷にはなんのかかわりもない。まして男、嵐のようにやって来て、夜があけると言葉ひとつ掛けずけろりと出ていったあの人に、わかるかしら。

応是綠肥紅瘦。

葉の緑ばかりがほつてり肥え、花のくれないの瘦せほそつていようことが：

清照に先だつ詞人晏殊（九九一—一〇五五）に「くれないをなまめき緑をさなく化粧して」の句がある。蓮をうたつたものではあつても、緑は幼なくういういしければこそ花の紅の樂しげに輝やこうものを、葉ばかりぬけぬけと茂つては神仙の花としておれざるをえぬではないか。

この「如夢令」は、作られた直後からたちまち人々に嘆賞讚美されたらしい。清照と同時の批評家胡仔が「近ごろの婦人で文詞にたくみな人では李易安はことに佳句に富む。如夢令の“綠肥紅瘦”の語はたいへん清新だ」といったのははじめとして、「委曲精工、含蓄無窮」「人工天巧」「絶唱」などの評語がささげられた。いずれも当たっている。そうして、波多野氏がこの詞を孟氏の「春曉」、白居易の「惜牡丹」等と比較し、「もとより詩と詞と世界相異るとはいえ、所詮は男性と女性とのロマンスの違ひばかりでなく、婉麗靈秀と悽婉深微とにより、一頭地を抜んで、正に小令中の神品」というのは深切な批評とすべきだろう。

これを明誠死後の作と見る人がある。作時はわからぬとするのがおだやかだが、誤りを恐れずにいえば、新婚後数年の間のものと見たい。「紅瘦」とはいつでもそのくれないは、たとえば李賀の「墮紅殘萼暗參差」のくれないよりはずっと若々しい。「試問」の句にはあどけなささえ感ぜられる。春愁とはいっても後年の作の慘澹とは響きを異にすると思うが、いかがであらうか。

（一九八二・一一・二五）

一九八〇年五月三十日

学校から帰ったら、お父さんのお友だちの人が来ていました。それで、わたしは、コーヒーと、あられと、ピナツを出しました。

それから、すぐしゅくだいをしました。かん字で知らない字があったので、国語の本を見て、書きました。どうしてもわからないのは、おばあちゃんにききました。

五月三十一日

ピアノの先生のところへ「ピアノのおけいこ」に行く日でした。わたしは「なんとなくやだなあ」と思いました。それから、少しピアノのれんしゅうをして、おわったら行きました。でもせんぜんまるがもらえませんでした。「いっしょうけんめいひいたのになあ」と思いました。

新しい曲を先生に教えてもらいました。

六月三日

朝、少し早くおきてみたら、雨がやんで、よいお天気になっていました。わたしは、野さいをうえてあるところに行きました。とうがらしと、トマトと、きゅうりと、さつまいもと、じゃがいもと、なすが、うえてあります。水をやってから、よく見ると、みんな大きくなって、なすなんかは、星形の、むらさきで、こい黄色のめし

べとおしべのある、花がさいていました。花びらには、一まいに一本ずつ、線が入っていました。花は、花びらが七まい、がくが七まい、おしべが六本、めしべが一本でした。「きれいだなあ」と思いました。

六月八日

今日、お父さんの妹で、てるみさんという、わたしのおばさんがずっと前にしんだので、その三十三回きのほりようだったので、お父さんの弟のぶおおじさんがきました。

長いことおきょうをとなくて、やっとおわりました。おわったら、おじさんたちは、昼ごはんを食べました。わたしは、おきゅうじをしました。おじさんたちは、食べおわると、いっしょうけんめいに、話をしていました。

六月二十二日

夕方、えんがわで「とびらをあけるメアリーポピンズ」という本を読みました。その本には「マザーグース童謡しゅう」や「緑色の童謡しゅう」などの人物も、のっていました。とてもおもしろく、ゆかいにかいてありました。

この本を書いた人は「F. トラヴァース」という人で、メアリーポピンズのシリーズは、四さつあります。だい一さつ目は、「風にのってきたメアリーポピンズ」。二さつ目は、「帰ってきたメアリーポピンズ」。三さつ目が、「とびらをあけるメアリーポピンズ」。四さつ目が、「こうえんのメアリーポピンズ」です。

わたしは、そのうちの「とびらをあけるメアリーポピンズ」をもっています。